

## プロローグ 魔剣使い

いつの世も、人は傷つけあっている。

「絶対にここは死守せよ！ この平原を抜かれたら、帝国が危機に陥る！」  
ただただ広い草原。

本来は整備された街道のみが踏まれるだけの、穏やかな場所だ。  
けれども、今は違う。

見るも美しい平原は今、多くの人間の足で蹂躪されている。

「帝国の戦士たちよ！ ここそ限界を超えるときだ！」

黒の甲冑を身に纏った軍団。

その先頭の兵士が雷のような一つの大声をあげる。その後に、幾万の怒号が響く。  
そしてその戦士の雄叫びに被さる、それと同じ数の声が響いた。

「連合軍よ！ 今日で帝国は崩壊する！ 我に続け！」

黒の軍団と対する人間たちは、一色ではない。

兜も鎧、それらの形状と色。およそ十種類の系統が見受けられた。

その多種多様な軍団を率いる、先頭の赤い甲冑の男が一つの短剣を掲げていた。  
途端に、黒い甲冑の兵士たちが一斉に叫んだ。

「魔剣だ！ 魔剣使いが出たぞ！」

「全軍！ 魔剣使いを集中的に狙え！」

進軍していた黒い兵士たちが、赤い甲冑の男の元へ殺到する。

まるで蟻のように蠢く黒の集団を見据え、赤い兜を被った男は、小さく笑った。

「愚かな帝国の人間ども！ 我が『百鬼夜行』の力をとくと見ろ！」

赤い兵士は手にしていた短剣を、迫りくる黒い兵士たちに目がけて、投げた。

短剣は、鏑も鞘もなく、ただ黒鉄で拵えた柄があるだけのダークと呼ばれる剣である。

甲冑を着込んだ人間に対して殺傷力を発揮するとはとても思えない、ちんけな得物である。

「散開しろ！ 魔剣が来る！」

しかし、大したことがないはずの短剣が投げられたとき、黒の兵士たちに緊張が走った。

たった一本の剣を避けようと、大の男たちが一斉に散り散りになろうとする。

その回避行動は、間に合わなかった。

黒の兵士たちに当たる寸前で、投擲された短剣が白く光った。

その光量は人の目をくらますほどのものではない。

だが、変化は起きた。

短剣が一つから、二つに増えた。

そして二つから、四つへ。

さらに四つから、八つへ。

倍々と、空中で短剣は手品のよう<sup>に</sup>増え続けていく。

「まずい！ にげ、」

黒の兵士たちは叫び声をあげる前に、呑まれた。

空中で次々に増え続ける短剣は、瞬く間に大河の奔流になり、文字通り剣の海となった。

そして黒の兵士たち、ざっと千人ほどを一瞬のうちに大量の短剣の海の下に沈めた。

「げ、ゲリヘル様……」

「くそ！ 怯むな！ 全軍、魔剣使いを討ち取れ！」

黒の兵士たち、帝国軍の指揮官の男が声をあげる。

しかし、兵士たちに勢いはない。

剣の波に呑まれた者たちの横っ腹を、回り込んだ連合軍が大いに叩く。

本来であれば連合軍と帝国軍、その兵数は同等。

しかし増殖する魔剣に帝国軍は絡めとられて、動けなくなったところを撃破されていく。

一秒もしない内に兵士たちを覆い尽くすほどの量になる短剣の海に、帝国側は大いに混乱した。

この短剣を連合軍に手にされた帝国軍は、この平原の戦いに繋がる、これまでの戦いの数々に敗北を

喫してきた。

なんとか対策を打とうとしてきたが、打開策は見当たらなかった。

異常な速度で増殖する短剣への対策は何もないまま、この戦いは始まってしまった。

ゆえに、帝国軍は当初の計算の通り、何もできないまま敗走しつつあることを察していた。

魔剣により、帝国軍が劣勢になりつつある戦場。

そんな中に、それは降り立った。

何の前触れもなく、それは落ちてきた。

まるで雷。天地を割ったかのような轟音が戦場を叩き割った。

音と同時にやってきたのは、暴風と地震。

大地を震わす何かが降り立った衝撃で、風をも呼び込んだのだ。

風は人を蹴散らし、大地は人を転ばした。

「な、なにが……」

帝国軍の指揮官、ゲリヘルが尻もちをつきながら、辺りを見渡した。

兵士が進軍する際に起こる砂埃、その数十倍の量のものが空中を舞って一気に視界を悪化させた。

まるで大雪の世界のように、辺りは白くなった。

また魔剣の仕業なのか？

ゲリヘルの脳裏に最悪の予感がよぎる。しかし連合軍の魔剣が増殖以外の力を発揮させたところは見たことがない。

隠していたというならば話は別だが、連合軍優勢の状況でお披露目するとも思えない。それに戦場に横たわる人間の中には、連合軍の兵士の姿もある。まさかここにきて味方をも巻き込む攻撃に出たわけでもあるまい。

「な、なんだ………あれは」

混乱するゲリヘルへ答えを突き付けるかのように、それは現れた。

轟音と地震の答えは、簡単だった。

轟音は、ソレが大地に突き刺さった音。

地震は、ソレが大地に突き刺さった衝撃。

暴風と砂埃は、ソレが大地の突き刺さった際に砂を巻き上げたから。

砂の霧の中、ゲリヘルがソレを確認できたのは、たまたま距離が近かったからだ。

しかし、次第に霧は晴れていく。

ゆえに、平原の戦いに参加していた人間全てがソレを視認しただろう。

もしかしたら遠く、離れた帝国の街からも、ソレは見えたかもしれない。

ソレは、巨大な剣だった。

巨大、というのが適切な言葉だったかも怪しい。

ソレは、恐らく両刃の剣だ。

しかし刃の幅が数百メートルはあろうほど広く、刀身は地面に突き刺さった状態でこの世界のどの建物よりも高く見えた。

うっすらと上空に鏢と柄らしき部分が見える。

しかしそれは剣という形をした、建造物といったほうが正しいのかもしれない。

もちろんだが、ソレがどうやってこの平原に現れたかはゲリヘルにはわからない。さつきまで平原には兵士たちしかいなかった。

魔剣も増殖する短剣以外、この戦場に存在するとは聞いていない。

「な、なにが起きているんだ……？」

ゲリヘルは困惑の極みにあった。

兵士たちを動かす、同じように固まっている連合軍を強襲すべきか。

得体のしれない巨大な剣を警戒し、一度退かせるべきか。

判断に迷うゲリヘルだったが、その前に動いた者がいた。

それは帝国軍でもなければ、連合軍でもない。

いつの間にか巨大な剣の前に居た、青い外套を着た茶髪の若い男だった。

外套の下は、普通の布の長袖とズボンで、更には手ぶら。

とてもではないが戦場にくるような恰好ではない。

しかし無表情の顔面にある眼の光は鋭く、爛々と輝きながら一点を見据えていた。

その視線の先は、ゲリヘル同様に転倒した連合軍の赤い甲冑の男。増殖する魔剣の持ち主だ。

「失礼した」

男の声ははっきりとした、堅い口調だった。

「国と国の命運をかけた戦いで横やりを入れてしまったのは申し訳ないが、俺はその魔剣に用がある」  
「な、何を言っている……？ 我の『百鬼夜行』を譲れと言っているのか……？」  
「ああ」

外套の男の発言に、困惑していた連合軍の兵士の目の色が変わった。  
それもそのはず。

短剣の魔剣は、連合軍が帝国軍との戦いを破竹の勢いで制してきた勝因であり、生命線だ。  
それが無くなるということは、後一步で帝国を制圧できるという目論見も崩しかねない。

国の運命すら変わりがかねない外套の男の要求に対して、連合軍の兵士たちは立ち上がり、武器を構え始めた。

しかし、外套の男の態度は変わらない。

「その魔剣を渡してくれるのなら俺はすぐにここを去る。この戦いには関わらないと約束しよう」  
「全軍！ あの外套の男に突撃せよ！」

連合軍の赤い甲冑の男は、外套の男に対して何も応じず、辺りの兵に突撃の指令を下した。  
突然現れた巨大な剣と何らかの関わりが見られる以上、連合軍としては無視できないからだ。

様々な色の甲冑の兵士たちが突撃してくるのを見ながら、外套の男は小さく息を吐いた。  
「やはり素直に渡してくれるはずはないか」

小さく呟きながら、男は外套の下に何かを取り出した。  
橙色の柄、赤い刀身のフランベルジェ。

手ぶらだったはずの彼が、一体どこから出したのか。  
その疑問を口にする者はいなかったし、外套の男自身も答えることはなかった。

そして、その戦いは一時間後には決着がついていた。

世界には、結果だけが残されている。

連合軍は切り札だった魔剣を失くして、帝国軍に大敗。

帝国軍は、この平原の戦いに勝った上で敗走する連合軍の背を大いに叩いて、領土から追い出した。

この勝利によって、帝国軍は亡国の危機を乗り越えたとされている。

ちなみに。

突如、巨大な魔剣を扱ったとされる謎の剣士が現れたと多くの帝国兵の証言があった。

が、それに反して大地に突き刺さったという巨大な魔剣の姿形は平原には残されていなかった。

その上に謎の剣士自体も戦場からいつの間にか消え去っていたという報告があることから、後世には集団幻覚が発生したと記録されている。

## 1 就職

とある世界。

魔法と呼ばれる技術が生み出され、人々の生活を変えた世界。危険な野生動物、魔物と呼ばれる生き物がある世界。

帝国と呼ばれる国家の、とある街。

レンガ造りの建物ばかりが並ぶ、その街の中心にその建物はあつる。ギルドと呼ばれる民間の職業斡旋所。

そこで一人の女性が働いていた。

「リーフ！ ローガンさんに渡す書類ってどこだっけ！」

「昨日私が先輩の机の上に置いておきましたよ」

「リーフさん。バムンクさん宛のお荷物はどこに置いておけばいいですか？」

「裏の倉庫に入れておいて。ちよつとだけ保管を頼まれているから」

「リーフ！ ごめん！ 飛び込みの方が受付に来ているから対応してくれる！？」

「了解です」

ときばきと仕事をこなすのは、栗色のショートカットの女性。

リーフと呼ばれる若い女性である。

ギルドで働き始めてから五年が経過して、色々な仕事を任されるようになった中堅の受付嬢だ。

『街の発展と調和のために』をモットーに掲げるギルドの理念に共感し、自分の仕事に誇りをもった女性である。

リーフは事務部屋から、先輩の指示通り受付に回る。

飛び込みとは、ギルドに初めてくる求職者のことである。

手が空いていない先輩の代わりに、リーフが対応することになった。

「すみません、お待たせしました。リーフと申します」

「いや、急に無茶を言っすまない」

受付机の向こう側に居たのは、青い外套を着た若い茶髪の男だった。

整った顔立ちだが、帝国の人間とは微妙に系統が違うことから異国の人間であることが見て取れた。

もともとギルドにおいて人種は関係のないことなので、リーフは気に留めることなく対応した。

「いえ、本日はどのような用向きで？」

「魔剣についての情報が欲しい」

「え？」

男の発言に、リーフは目を丸くした。それもそのはず。

その魔剣という存在は、ついこの間まで帝国を亡き者にしようとした帝国の人間にとっては忘れがたいものだから。

ちなみに男の周りにいたギルドの客も同様だった。ギルドは同じ建物の中に酒場も併設されているので、一般客の出入りも珍しくない。

男を中心とした一帯が静まり返る中、リーフはいち早く我に返った。

男の動向が読めないなので、今まで厄介な客を捌き切ってきたリーフは、経験の引き出しによって事務的な対応をした。

「まず、あなたは冒険者として登録はお済みでしょうか？」

「そういうものが必要なのか？」

初耳だという男の表情が、リーフにとっては初めてだ。どんな悪質な客もその情報は知っていた。

「はい。誰にでもできる仕事ばかりではありませんし、身分の不確かな方に情報を提供できないので」  
「では、やり方を教えて欲しい」

「まずは身分証明書を提示してもらえますか？」

「ないのだが、どうすればいい？」

「どうやって入国してきたんだ、この異国人。」

「何もできません。どなたかに紹介状を書いてもらってください」

「この地域に来たばかりで知り合いが一人もいないのだが」

「お帰りは後ろの扉です」

凍った笑顔のままリーフは言い切った。

冷たいようだが、あまりに信頼性の欠ける人間に紹介できる情報も仕事もない。

「……ふむ。そうか」

外套の男は一つ頷くと。

「これは失礼をした。では、退散するでしょう」

特にごねることなく、至極冷静に背を向けた。

あまりにあっさりしていたので、逆に若干申し訳なく思ってしまう。

リーフは男が帰るのを止めようかと思ったが、その前に。

「ああ、その君。ちょっと待って」

「む？」

やんわりと声に、外套の男が立ち止まる。

彼を止めたのは、左目にモノクルをかけ、魔法使いの証である大きな木の杖を持った青年だった。

背中に垂れたフード付きの黒いローブからは、真っ白な長い髪が出ている。

「リーフさん。そんなに邪険に扱ってはいけませんよ」

「バムンクさん……」

静かな湖を想起させる雰囲気を纏った青年の名は、バムンク。  
柔らかな物腰と、人が好過ぎる性格が彼の持ち味だ。

「見たところ腕も立ちそうだし……どうだろう？ 少し腕試しをしてもらって、彼の人となりと実力を見てあげてはいかがだろうか？ なんなら私がそう推薦したとギルド長に報告してもらってもいい」  
「いや、バムンクさんがそこまですることは……」

「困ったときはお互い様だよ」

「まあ……あなたがそう仰るのであれば……」

バムンクの提言に、リーフは渋々頷いた。

その様子を見守っていた外套の男は、疑問顔で戻ってきた。

「失礼。こちらの御仁は？」

「バムンクさんといって魔法使いにして、街一、いえ国一の歴史学者です。帝国の中枢にも招かれています、優秀な方です。まあ……人が好過ぎるのが玉にキズですが」

「ははは、人に良くしようとかは特に考えていないんだけどねえ」

苦笑しながら語るバムンクだが、人当たりと気配りの良さで街の人間から絶大な信頼を得ている。

彼の提言とあっては、普段から何かとお世話になっているギルドとしても断れない。

「ではまず簡単な害獣……そうだな、小型の魔物の討伐から始めてみてはどうかな？」

バムンクの言葉に、外套の男は「言い忘れていた」と言い始めた。

「そのこととお願いがあがあるのだが」

「……えーっと、なんでしょうか？」

正直まだあるのかと受付嬢は思ったが、他の冒険者の手前もあるので口には出さないで聞いた。  
「生き物を殺す仕事は遠慮したい」

「は？」

「武器は多少扱えるのだが、殺生が苦手なんだ」  
きつぱりと言い切った男に、リーフは。

「ふ、」

「む？」

「ふざけているわけではないのですね……!!」

叫びそうになるのを、一瞬こらえた。

「ああ、大真面目だ」

それに対して、男はキリっとした良い顔で答える。

「これは困ったな……」

男の隣にいたバムンクも、今度は困り果てた苦笑いを浮かべるしかない。

「ギルドの依頼の大半が運搬業者の警護や魔物の討伐だったり、いわゆる生き物の生き死にに関係するものだ。いや、勿論生き物を殺さないという信念は決して悪いことではないのだけれどね……」

「つまり……あなたは場違いなことを仰られているということですよ」

リーフは、バムンクの言葉を勝手な意識した。

「そういうものなのか」

「あなた、ギルドというものをご存知ないのですか？」

「ああ。色々便利な場所ではあると聞いたが、初めて足を踏み入れた。なにぶん田舎者でな」

「はあ、ちなみにご出身は？」

「いや、どこの国に属しているかもわからない山奥にあったもので、俺もわからん」

「……」

どうしよう、胡散臭さがとめどない。

「じゃあお名前は？」

「リュウイチだ」

「……随分変わったイントネーションだね。僕の記憶では何処の地方なのかわからないよ」

「バムンクさんが知らないって……本当にどこから来られたんですか？」

歴史学者のバムンクは世界の国々の成り立ちに精通している。ゆえに人の名づけられ方から何処の生まれか察するのは容易い。逆に言えば彼が知らぬ名前と言えば、帝国で代わりに知る者はいない。

「うーむ、それにしては言葉も流暢に話せているし……しかし君は帝国の人間と言えるほど、容姿の傾向が違うように思えるね」

「さあ。俺も詳しくは知らん」

「記憶喪失、とかでもないのだよな？」

「親の顔も覚えてるから、それは違うな」

リーフは正直記憶喪失のほうで幾分かやりやすかったと、不謹慎を自覚しながらも考えてしまった。

「……まあ、別に生き物を殺したりするのがギルドの紹介する仕事ではありませんから、あなたの希望も叶えられなくはないです」

「そうか。それは有難い」

「ただし！ ギルドの冒険者として登録される以上、多少は腕に覚えがないと困ります。あなたがギルドの冒険者の評判を落とすと、他の冒険者さんたちが迷惑を被ります」

「それは、俺としても本意ではないな」

「あなた……こちらの言葉には素直に従ってくれるんですね」

「見聞が狭い者は、とりあえず人の忠告を聞いておくものだと思っている」

これまで特に笑いもせず、かといって怒りもせず、淡々と男は接してくる。

それが世間知らずな部分と合わさって、リュウイチが何を考えているか、リーフは判断がつかない。

「ちーっす。リーフさん、例の書類を取りに来たぜえ」

不意にギルドの入口から別の男の声がする。

兜こそ被っていないが、黒い甲冑を身に着けた長身の男だ。

この場の誰よりも背が高く、男が肩に担いでいるスパアーはそれ以上に長い。

人を遠ざける野性味を感じさせる荒々しい雰囲気はあるが、景気の良い笑顔がそれを良い感じに相殺している。

男はリュウイチに気づくと、気さくに話しかけた。

「お、なんだ。見ない顔がいるじゃねえか。新入りか、兄ちゃん？」

「ああ。今まさに冒険者としての心構えを指南して頂いてる」

「へー。まさに登録したてのルーキーってわけだ。仲良くやろうじゃねえか」

槍の男は破顔しながら、リュウイチの肩を叩く。

その様子を見ながら、リーフは名案とばかりに手を叩いた。

「ローガンさん。丁度良かったです」

「あん？ オレ？」

「はい。リュウイチさんも準備はよろしいですね？」

「俺もか？」

出会ったばかりの二人、ローガンとリュウイチは顔を見合わせた。

★

「ここは？」

リュウイチとローガンを連れてやってきたのは、何も無い土の地面があるだけの場所だ。位置的にはギルドの建物がある、すぐ裏手である。

「ただの空き地です。あなたの武術の腕前を見させてください」

「武術？」

首をかしげるリュウイチに対して、神妙にリーフは頷いた。

「ギルドのお仕事の中には戦わなくてはいけないものもあります。御者様の荷車を盗賊から守るとか」

「殺生は苦手なのだが」

「なら、殺さない程度に相手を圧倒する力を持っておられないと困ります。だいたい簡単な仕事しかなさず、腕の立たない人に魔剣なんていう貴重な宝の在処の情報なんて回ってきませんよ」

「そういうものか」

「そういうものなんです」

力強く肯定すると、隣にいたバムンクも同意した。

「そうだね。残念だけど、リーフさんの言う通りだよ。魔剣というのは余程大きな力を持っていれば国が徴収しに来るけど、中には歴史的価値が高い宝剣としての側面もあるものもある。宝剣は個人が持つことを認められているから、君以外にも狙っている人は多いよ。でも大概が危険な場所にあるから、実力の高い冒険者にしか情報が公開されていないけれどね」

「なるほど」

バムンクの解説に、リュウイチは聞き入っている。

あまりの素直さに、リュウイチから少し離れて待機していたローガンが苦笑する。

「ま、そういうわけだ、兄ちゃん。魔剣の情報が欲しけりゃ、強くないと話にならねえってわけだ」  
「ということは、これは俺の試練ということか？」

「ああ。この二級討伐者のローガン様に対して、どこまで戦えるかって方式だな」

「二級討伐者とは？」

「魔物退治する冒険者の格付けだよ。一級から十級まである。つまり、俺は上から二番目のランクにいるってことだ」

「なるほど、あなたは相当高位にいる冒険者ってことだな」

「その通りよ。この試験に異論はあるか？」

「ない。元より無茶を言っているのはこちらだ。機会を与えてくれるだけでも有難い」

「あっさりと言顔で言い切るリュウイチに対して、ローガンはふっと軽く笑った。

「いいねえ。つつても、冒険者としてのランクを図るためのものだろうか？ 結果次第で追い払ったりはしないんだろ、リーフさん？」

「バムンクさんの紹介ということになっていきますし。ギルド登録のほうはやっておきますよ」

リーフ、というかそれがギルドのできる譲歩だ。

「つうわけだ。この試験次第で、兄ちゃんがどんな仕事を割り振られるかが決まる。つまりは魔剣にどれだけ早く辿り着けるかが決まる。せいぜい気張りな。ちなみに」

「おもむろにローガンは担いでいた槍を、リュウイチに突き付けた。

「これが俺の得物だ。兄ちゃんは何を使うんだい？」

青銅の持ち手に、鉄の穂先。

槍自体はごく普通の作りだが、ローガンの槍術は一流だ。

生半可な武器でも生半可な腕でも太刀打ちはできないが、リュウイチの選択は驚くべきものだった。

「リーフ殿。剣を貸してくれ」

「ほう……」

即答するリュウイチに、ローガンは笑みを浮かべたまま目を細めた。

「槍使いに剣で挑もうとするあたり……兄ちゃん、剣の腕に自信があるのかい？」

「生憎、剣しか使えないのでな」

「……魔法に頼らないガチガチの剣士ってわけか、面白いねえ」

二人の言葉の応酬に、更地の緊迫感が増す。

「はい、どうぞ」

言われた通り、リーフはギルドの倉庫に保管されていた、両刃の長剣をリュウイチに手渡した。

「感謝する」

礼を言いつつ、リュウイチは特に構えもせず、だらりと提げた。

(うん?)

その佇まいに、リーフはふと首を傾げた。

リーフはこれでもギルドの受付の仕事をし始めて長い。

ゆえに冒険者の実力も、普段の生活の立ち振る舞いから、ある程度は予測できる。

それが実戦の場であれば尚のこと、彼女の洞察力は冒険者たちのそれだ。

だからリュウイチの力も、当然のように推し量っていた。

重心の運びとか姿勢の良さで、そこその実力と判断していた。

だが、その評価は全くもって間違いだっと思ひ知らされた。

「……あん？」

ローガンもまた虚をつかれた。

彼もまたリーフと同様のことを考えていたのだろう。

剣を振るったリュウイチの姿に、彼は目を丸くしたのだから。

「はっ」

気の抜けた声と共に、剣がローガンの眼前に迫る。

だが、それは空を切った。

「……」

ひょいっと、ローガンが頭を後ろに逸らすだけで避けられたからだ。さらに次が来る。

「せい」

「……………」

今度は胴体。しかしこれも一歩下がるだけで、避けられた。さらにもう一撃。

「とう」

「……………」

ローガンが槍の穂先で、剣の刃を止めた。ガキンツ、と音だけは良いものが響いた。

「おやおや……………」

リーフの隣にいた、バムンクも開いた口が塞がらない。

そして、その剣を受けていたローガンは肩を震わしている。

「む。どうした、ローガン殿？」

剣を防いだまま動かないローガンを不思議に思ったのか、リュウイチもまた剣を手元に戻して攻撃を止めた。

そして、長身の槍使いは急に大声を張り上げた。

「弱い！」

鋭い怒声が、空き地に響き割った。

「なんだ兄ちゃん！ 得物に慣れてないとか、だから間合いが測れないとか、もうそついう慣れから生

まれるミスじゃねえぞ！」

「む？」

「下手！ 単純に剣の扱いがなっちゃねえ！ 剣に自信があったんじゃねえのか！」

「ああ。武器に関してはこれしか取り柄がない」

「んじゃあ絶望的だわ！ もっと脇を締めろ！ 馬鹿正直に敵の懐に飛び込むな、反撃で死ぬぞ！  
もっとフェイントを入れて狙いをわからねえようにしろ！」

「ローガン殿……」

「ああん！？」

「俺の欠点を即座に指摘できるとは、大した御仁だ」

「俺がお前に説教してるんだからな！ 俺を褒めても何も生まれねえよ！」

「淡々と称賛するリュウイチに、止めとばかりにローガンは叫んだ。」

「まさか……これほどへっぴこだとは思いませんでした……」

「リーフもまたリュウイチの剣腕に絶望していた。」

「できる剣士に見える風体というだけで、リーフどころか子供でもわかるくらい武術の動きができていない。有体に言えば「剣だし、刃が当てれば勝てるだろう」と言わんばかりの大振りだ。ローガンの指摘通り、避けられて反撃されたら確実にやられると断言できるほどに、攻撃が大雑把だ。」

「うーん……もう少し彼の腕を見てあげたらどうだい？」

「早くも試験がお開きになりかけている空気を察したのか、バムンクが助け舟を出した。」

「仕方ねえな……ったくよお。じゃあ適当に俺も攻撃するからな？」

「了解した」

「こめかみをかきながらローガンが流水のような動きで、槍を振るった。」

「ヒュッと風を切る音とともに槍を鞭のようにしならせ、穂先の根本、銅金をリュウイチへめがけて叩

きつける。

「え？」

ローガンが間抜けな声を出すと同時に。

「きゃあ！」

リーフは両手で両目を覆った。

直後。

バガンッ！

と、鈍い音がした。

槍の柄がリュウイチの額に直撃したからだ。

「……………マジ？」

ローガンがまるで避ける素振りを見せなかったリュウイチを、おそろおそろ見る。

そして、そいつはなぜか感心したように言った。

「中々の衝撃だった。しかも速すぎて見えなかった」

「馬鹿野郎！ まともに当たる奴がいるか！ 刃じゃなくても、俺の槍の銅金は岩も割れるんだぞ！」

「ほう、それはすごい」

「それは兄ちゃんの脳みそだよ！ おい、本当に怪我してねえのか！？」

「そうですよ！ 大丈夫ですか！？」

リーフも慌てて阿呆な剣士に駆け寄る。

前髪をかきあげてチェックするが、頭部には傷一つないので胸を撫でおろした。

「奇跡的に怪我は……なさそうですね。ああ、良かったあ……」

「体は丈夫だ」

「あーもう！ あなたの発言はいちいちイライラしますね！」

どうしてか一人平然としているリュウイチに、ものすごく腹が立った。

「もう結構です！ 当面あなたにはギルドの十級冒険者レベルの仕事をお願いしますので、その間剣の腕を磨いてください！ これではどこかのダンジョンに案内するのも怖すぎます！」

「そうか。魔剣の在処とは無縁の仕事か」

「あなたには魔剣どころか魔物の駆除すら紹介できません！」

少しも残念そうな雰囲気はないくせに、一々確認してくるリュウイチを怒鳴りつける。

怒る受付嬢の背で、ローガンが首を横に振る。

「兄ちゃん、よくこの街まで手ぶらで来られたな。余所から来た割に無傷なのが信じられねえ」

「そういうものなのか？」

「この間まで帝国と連合軍がドンパチやっていたせいで国境付近は物々しいし、戦争の影響でどこの国も軍備が整ってないからな。おかげで魔物とかの討伐まで手が回らないから、ちよつと森を歩けばフォレストウルフの巣に出会えるぜ」

「出会えるのは良い事なのか？」

「街の外は魔物だらけだから危ないってことですよ！」

あまりに的外れなことをほざくので、リーフが補足説明する。

「そういうこった、とローガンは嘆息交じりに頷いた。」

「リーフさんが怒ってくれるおかげで俺の頭も冷めたよ。ま、試験官役の俺から言わせてもらうと、あんたは落第点だ。のんびりと街の人の依頼でもこなして銭を稼いでくれよ」

俺はもう仕事に行くからよと、ローガンは槍を担いで踵を返した。

「あ、ローガンさん。お忙しい中、ありがとうございます」

「ういーす。今度酒でも一杯奢ってくれると嬉しいぜ」

背を向けながらヒラヒラと手を振るローガンに、リーフは頭を下げた。

一通りの出来事を静観していたバムンクも苦笑しながら、言う。

「まあ、ローガンさんとリーフさんの言う通りだろうね。素人目から見ても、君はちょっと実戦に出すには危なっかしい。魔剣クラスの場合に手を出すにはもう少し力をつけるといい」

「ああ。許可が下りないのなら、そうしよう」

あくまで淡々と受け答えるリュウイチは、リーフに向き直る。

「それで俺にでも紹介してもらええる仕事はあるのだろうか？」

「……一応あります。けれど登録手続きとか色々あるので、明日紹介してあげます。だから今日は宿でも探しててください」

「感謝する」

一礼をして、リュウイチは去っていく。

その背中は本当に歴戦の勇士の風格だ。実体はそうではないが。

「……よくあれで旅をする勇気が湧いてきますね」

毒づきたくはないが、バムンクの紹介という特例として登録する冒険者としてはあまりに心許ないので、リーフはつい口に出してしまった。

しかし隣にいたバムンクは顎に手を当てて、リーフとは違う感情を瞳に宿していた。

「……彼はどうして手ぶらなんだろうね？」

「剣の扱いが下手だからじゃないんですか？ あの腕では持っただけでも意味がないでしょう」

「けれど旅をするなら護身用の武器は必要だし、剣しか使ったことがないなら猶更自分の剣が欲しくなるものじゃないのかな？」

「それも……そうですね」

「まあ、そういう疑問は彼に尋ねるべきだね」

バムンクは首を横に振りながら、小さくなっていくリュウイチの背を見つめていた。

★

深夜。

目を跨いだ直後の、街。

リュウイチは一人で誰もいなくなった、その中を歩き回っていた。

「とりあえず、今日はまずまずといったところか……」

『ケシシシシ！ あれのどこがまずまずだよ！ まずい間違いじゃねえのか！』

『あっはっはー！ さすがはあたしの弟だ！ クレイジー過ぎて笑いが止まらねえ！』

「……………」

リュウイチ以外、誰もいない。

けれどもリュウイチとは違う声が二つ。

それで下卑た男の声と、快活な女の声だ。

その声が耳に入った途端、今までずっと真顔だったリュウイチの表情が崩れる。

眉間に皺を寄せた、苦い顔だ。

『あー、あたしらのことを無視したな？』

『いやあ、どう考えてもオレ様たちの方が正論言っているんだがなあ！』

「喧しい。周りに人がいないからといって話しかけるな。他の奴らと一緒に黙っている」

今日初めて感情を宿した、冷たく突き放すリュウイチの語気に、二つの声は更に大きな声で笑い返した。

『ケシシシシ！ それよりアイツがいたなあ！　ありゃあオレ様のことを見張っているんだぜ！』  
「ああ。俺と直接会っても顔色を変えなかったが、俺の存在を警戒していることには違いあるまい。やはり先に気づかれていた分、不利だな」

『あたしの見立てだと、お前の正体にまでは気づいてる。けど死んだはずのお前が怖くて、手出しできないんだろうな』

「何にしる様子見だ。この街にいるのが奴だけとは限らん。向こうから仕掛けてくるのであれば返り討ちをして終わりだ。闇討ちは……無理そうだな」

『へーい。あたしの出番はまだ先ってわけだ。んで、今夜はどうするんだ？』

「朝まで街の外を探索だ。特に森近辺には魔物が多くいるらしい。そういう人が寄り付きそうにもないところは、何かを隠すにはうってつけだ」

『ケシシシシ！　せいぜい気をつけるよな！　剣の扱いが下手な剣士様！』  
「黙っている」

本当に煩わしそうにしながら、リュウイチは一人街の外へ向かっていく。

目の前に、魔物の侵入を阻むために築かれた大門がある。

しかし、それをリュウイチは一足飛びで越えていった。

馬車をも悠々とくぐらせるほどの街の入り口を、なんともなしにただの跳躍で躲した。

きつと目撃者がいても見間違いだと思っただけに違いはない、人間を超えた所業。

「さて。魔物に遭わないといいが」

それを本人は当たり前のごとくのようにしながら、門の向こう側へ綺麗に着地した。

そして、例え一級冒険者でも近づかない魔物が住む夜の森へ足を運んだ。

## 2 仕事

ギルド登録試験から一日が経過した次の日の朝。

「あなたには街の掃除を主にやってもらおうかと考えています」

リュウイチがギルドに着くなり、にこやかな笑顔を浮かべた受付嬢のリーフが言い放った。

「掃除？」

「ええ。今のあなたに紹介できるお仕事は今のところ清掃活動ぐらいですね  
「なるほど」

昨日の登録における試験で、無様な姿を晒した代償ということらしい。一撃もローガンに入れられず、逆に一撃を普通にもらったので反撃の材料が何も無いことは自覚している。至極当然、滝の水が下に落ちると同じくらい自明の理だ。

それに悪い事でもない。プラス思考が働いた。

自分はこの地に来たばかりで、街の掃除をするのは土地勘を養う上で悪くない。

「了解した。では、さっそく説明をお願いしたい」

快諾すると、なぜかリーフの方が啞然とした。自分は何がおかしなことを言ったのだろうか。

それを口にする前に、ちよいちよいとリーフが手招きしてくる。今でも十分に近いが、周囲に聞こえない小声で何かを話したいということなのだろう。

顔を寄せると、本当にか小さな声でリーフは言った。

「……いいんですか？ このままだと魔剣の情報を手に入れるには遠回り過ぎるプロセスを踏んでいきますよ？」

「そうなのか？」

「はい。ここからのスタートだと五年でも早いぐらいです」

正直に言ってくれる。確かにまともな人間の時間の感覚からすれば、十分に遅いペースだ。手掛かりなしでも自分で探したほうが、時間的効率は良いだろう。

「リーフ殿がそれを言っているのか？」

「良くはないですけど、だからといって黙ったままのほうが良くないと思っています」

実直な方だとリュウイチは素直に感心する。自分のような素性もわからない存在を取り立てること自体、本来は嫌だろうに。

「ご心配痛み入る。だが、それも承知の上でギルドの仕事をやらせてもらいたい」

「……あなたが良ければいいんですが。でも魔剣の情報なんて、ただでさえギルドには入ってきませんよ」

「そういうものか」

「軍部経由等でない、ギルドに直接タレコミが入ったのは十年くらい前らしいですよ」

「そうか」

簡単にひよっこりと出てこないのが魔剣だろうと、リュウイチは勝手に納得した。

少しも動揺しなかったのを見て、リーフは「私は言いましたからね」と澄まし顔で仕事の説明に戻った。

「改めまして。あなたの本日のお仕事は、排水溝の掃除です。報酬は出来高ではなく、時給制になります。だからといって手抜かりは許されませんからね」

「報酬？」

耳なじみのないワードに、リュウイチは思わず説明の途中で口を挟んだ。

「はい。お給金のことですが……あ、言っときますけど交渉はできませんよ。ギルドを介したお仕事の

報酬は開示されたものがそのまま決定報酬となります。それが嫌ならギルドに頼らずフリーランスになることですが、実績の無い方には難しいですからおススメしませんよ」

途中で何かに気づいたかのようにリーフは、報酬についての補足説明をしてくれる。だが、リュウイチが報酬という単語に食いついたのはそういうことではない。

「そういえば、言い忘れていたことがまだあった」

「何ですか？ 排水溝の虫が怖いとか言いませんよね？」

「いや、違う。仕事の報酬についてだ」

「だから言いましたよね？ 報酬はギルドから提示された金額が上限ですって」

「ならば下限の交渉は良いのだな」

「……………はい？」

たっぷり数秒黙ってから、リーフは頬をひきつらせたまま首を傾げた。

「俺への報酬は一切不要。これから紹介される仕事は全てそうしてくれると助かる」

「……………は？」

「旅をするのに必要な貯蓄はあるし、欲しいものも特にない」

「……………」

「それでは清掃道具をお借りしたい。ごみを手掴みするのは効率が悪いからな」

仕事道具の在処を尋ねようとして、リュウイチは固まった。

リーフが出会ってから、初めて見る満面の笑顔になっていたからだ。

ここまで機嫌を良くした覚えはない。

しかし機嫌を損ねるような発言もしただろうか、とリュウイチは考えた。

「受け取ってください」

「む？」

答えに行き着く前に、強張った声が放たれた。

「お給金は必ず受け取ってください。うちは慈善事業をお願いしているわけではないので」

リーフの口調はあくまで機械的だった。用意された原稿の文面を読み上げることのほうが、よっぽど抑揚がつくだらうと思わせるぐらいに。

「しかしだな、受け取っても使い道がない」

「ならばご自分の手でどこかへ寄付でもなさって下さい」

「そうか……その手があったか」

「ええ」

では教会や役所でも探して報酬はそこに放り込むとしよう。

金の使い道を決めたところで、リュウイチはリーフの笑顔の裏にある感情に推測がついた。

「……リーフ殿。もしかして怒っておられるのか？」

「当たり前です。タダで冒険者を働かせたとあってはギルドの評判と、その信頼関係に関わります」

「……ああ、そういうことか」

確かに労働力を貸す冒険者と契約を対等に交わしているギルドであるのに、冒険者を無賃金で働かせられていることが世間に知られれば、ギルドの風評としては良くはない。

「それはすまなかつた」

「よろしい」

謝罪を入れると、リーフの怒りのオーラが収まった。

今後はもう少し他人の立場になって発言しようと、リュウイチは反省した。

★

リュウイチに仕事を紹介してから翌日の夕方。

リーフはギルドの受付の椅子に腰をかけたまま、両の目頭を押さえていた。

「おっす、リーフさん。景気はどうだい？」

「ああ……ローガンさん」

「疲れた顔してんな。どうした？」

気楽な笑顔を浮かべながら話しかけてくるローガンに、リーフは背伸びをしながら答える。

「あのリュウイチさんという方の扱いに困っていて……」

「ああ、あのへっぽこ兄ちゃんか。昨日ドブ掃除してんの見たが、あいつが何かしたのか？」

「えっとですね、まずその清掃のお仕事の報酬を要らないと突っぱねてきました」

「はあ？ あの兄ちゃん、普段は霞でも食ってんのか？」

ローガンの冗談を、本気でリーフは不安に思った。

報酬については、リュウイチは全額をどこかへ渡してしまえばいいに折り合いをつけていたようなので通貨という概念を知らないのかと疑ったぐらいだ。

しかしリュウイチの対応に気疲れた理由はそれだけではない。

「それと排水溝に溜まった泥の掻き出しから、運搬まで全部自分でやると言い出しまして」

「……アッって確か一旦役所の隣の空き地に仮置きするんだよな？ あそこまで町中の泥なんか一人で集めてたら、一か月はかかるんじゃないか？」

「ええ、だから他にも清掃を担当される方はいるから協力してやってくれと言いつ聞かせるのに時間がかかりました」

「あの兄ちゃん、どこからそんな無茶苦茶な自信が出てくるんだろうな」

「熱心に仕事をしてくれるのは良いんですが、変な言動ばかりするのでどうしたらいいのかなと……」

「見た目はいけてんのに、あの兄ちゃんは口を開けばとんでもねえことしか言ってるねえからな」

「そうですね……何故ですかね……」

ローガンは散々な評価をしているが、過大でも過少でもないところにリーフも同意をする。

だが仕事の途中経過をこっそり見に行ったが、極めて真面目に取り組んでいたので安心と言えば安心だ。時折出る奇行は街に慣れてもらえればリュウイチも直してくれるだろうと、リーフが油断していたときだった。

「リーフさん、いらっしやいますか！」

ギルドの入り口から元気の良い声が飛び込んでくる。

入ってきたのは、頭から足まで黒い甲冑に身を包んだ大柄な男だ。その鎧兜はローガンとは違い、全身を完全に守っている。

その男は、街に配備されている帝国軍の兵士の一人である。

「衛兵さん。どうされましたか？」

「はっ！ リュウイチという清掃活動に従事している男について、報告があつて参りました！」

「えっ」

思わず蛙が踏まれたような声が出た。

「あーあ……」

同時に、ローガンが同情するような視線を向けてくる。

「彼が何か粗相を？」

「いえ！ 彼は昨日の朝から排水路に溜まったドブを掃除してくれてはいます！」

ですが、と衛兵は語尾を弱めた。

「その……自分はあの清掃作業は全部で一週間はかかると思っていました。なにせ街中の主要な排水路の掃除でありますから！」

「そうですね。数十人で行っているとはいえ、全体の工程ではそれぐらいはかかるかと」  
衛兵の個人的な予測に、リーフも首肯する。

その認識は間違っていないが、衛兵の言いたいことが見えてこない。

「その清掃活動が、自分の見立てではもうすぐその半分が終わると思われます！」  
「は？」

「そして聞けば、あのマントの男がものすごい手際で泥を引っ張り出しては運んでいるのが一因であるとのことですよ！」

「あの人……？ いえ、でもだからといって早すぎますよね？」

一人頑張れば倍の速度で工程が捲れるような話ではないはずだ。

他に原因はあるはずと問う。しかしそこで、ハキハキと喋っていた衛兵が口ごもった。

「なんだろう。ものすごく嫌な予感がする。」

リーフのこれまでの仕事経験がそう告げていた。

そして、それは衛兵の言葉によって的中したと確信させられる。

「あの男、昨日の朝から一回も休みをとっていないそうなのですが……大丈夫なんでしょうか？」

★

「あなた、何をやっているんですか！？」